

国立国語研究所学術情報リポジトリ

言語行動分析の観点：
「行動の仕方」を形づくる諸要素について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): linguistic behavior, move, strategy, orientation, multidimensional analysis 作成者: 熊谷, 智子, KUMAGAI, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002031

言語行動分析の観点

―「行動の仕方」を形づくる諸要素について―

熊谷 智子

(国立国語研究所)

キーワード

言語行動, はたらきかけ, 方策, 指向性, 多角的分析

要 旨

同じ目的をもつ言語行動でも, その実現の仕方はさまざまであり得る。本稿では, 言語行動の行われ方を記述し, その特徴を多角的にとらえるための分析の観点を提案する。

観点の収集にあたっては, 大量調査資料を用いて同一場面におけるさまざまな話者の言語行動を分析し, バリエーションがあらわれる諸側面を考察した。そして, その所見をもとに, 言語行動一般の特徴分析に有効と思われる以下の観点を抽出した。

- 全体的な構成：長さや複雑さ, はたらきかけの組み合わせ, 表現類型の組み合わせ, 「核」となるはたらきかけのあり方
- はたらきかけの表現：表現類型, インパクトの強さや情報伝達の明確さを調節する表現, スピーチレベル, 各種伝達手段(言語, パラ言語, 非言語)の使い方
- 行動上の指向性：目的達成指向／対人配慮指向のあらわれ方

1. はじめに

何らかの目的を達成するためにことばを用いて人にはたらきかけることは, 日常生活の中で数限りなく行われている。たとえば, 買物でもらったおつりが足りない気づいた時に, 店の人に何か言うとしたら, さまざまな発話が可能であろう。以下に, いくつか例をあげてみる。

- (1) a アレ, オカシイナ。
- b オツリ, 違ウミタイ。チョット見テクダサイ。
- c スミマセンケド, 千円出シテ, 四百円買ッテ, 百円足りマセンケド。

これらの発話は, いずれも同じ場面に起こり得るという意味では, ある一つの言語行動のバリエーションといえる。話者によって, また場面状況によって, 言う内容や言い方は異なり, それによって言語行動のもつ印象もまた異なってくる。上記(1)の直観的印象としては, aは漠然とした言い方だとか, cは説明調だとかいえるかもしれない。そうした「言語行動の仕方」の違いを形づくっているのは, どのようなことがらであろうか。言語行動の特徴づけや分類を適切に行う上で, どのような要因が有効にはたらくのであろうか。

言語行動の研究は, 挨拶, 依頼, 謝罪, 断り, など各種のものについて行われている(謝罪, 感

謝、依頼については、『日本語学』12-12, 13-8, 14-11の特集参照。対照研究では国語研1984, 井出ほか1986など)。しかし、従来の社会言語学的研究では、比較的短い発話でおわる行動、あるいは行為遂行の「核」とでも呼べる発話部分(依頼であれば「～シテクレマセンカ」などの部分)の言語形式などに関心が集中しがちであった。談話分析の立場から、言語行動を構成する「核」以外の発話要素にも着目した研究としては、ザトラウスキー(1993)やKumagai(1993)などがあるが、まだ数多いとはいえない。

さまざまな発話要素の構成体として言語行動をとらえる先駆けは、第二言語教育の分野における諸研究であろう(Olshtain and Cohen 1983, Kasper and Blum-Kulka eds. 1993)。そこでは、たとえば謝罪の発話から<詫びの慣用表現を述べる>の他にも<事情を説明する><責任を認める>などの遂行上の方策(strategy)を抽出し、謝罪の言語行動をそれらのセットとしてとらえようとする。また、そうした構成要素の選択や使用順序などに基づいて、第二言語学習者(非母語話者)と母語話者の行動の違いを探り、学習者にみられる母語(文化)の干渉、学習上の課題、あるいは中間言語のあり方の解明を目指している。これらの研究の方向性は、発音や文法の正しさとはまた異なるレベルでの、行動の仕方の適・不適というものが、効果的なコミュニケーションを考える上で非常に重要だということを示すものである。

個々の場合で言語行動の実現の仕方が異なるのは、方策の例にもみられるように、可能な選択肢が複数あって、話者が目的や場面状況などを判断しながら選択肢を選び、異なるやり方で組み合わせているからであろう。方策は言語行動の重要な要素であるが、それはやはりひとつの側面にすぎない。言語行動のどのような側面あるいはレベルに関して選択肢が存在し得るか、それらの選択や組み合わせのなされ方がどのような特徴に関わっているのかを探ることが、言語行動の「方策」という概念を拡張し、言語行動を多角的にとらえるために、不可欠と考えられる。

本稿では、言語行動意識に関する大量調査資料の分析を通して、行動遂行上の選択のありかを探り、その考察をもとに、より一般的なレベルでの言語行動分析の観点を提案する。第2節では、資料分析の方法について述べる。第3節では、資料分析をもとに、言語行動においてバリエーションのあらわれ得る諸側面をあげる。それをふまえて、第4節で言語行動分析の観点を整理し、第5節ではまとめと今後の課題を述べる。

2. 分析の方法

2.1. 分析資料

分析には、国立国語研究所が1972年に愛知県岡崎市で行った調査の資料(国語研1983)を用いた。調査では、簡単な絵を使って場面状況を提示して、そこで何と何を尋ね、得られた発話回答を録音・文字化している。今回分析したのは、以下の場面に関する回答である。

これから、あなたがふだんどんなことばをお使いになっているかをお聞きたいと思います。何も岡崎弁でなければいけないとか、標準語でなければならないとかいうわけではありません。いまから、いろんな場合をひとつひとつお聞きしますから、そういうとき、実際あなた

の話していらっしやるとおりおっしゃって下さい。

ではこんな場合はどうですか。

この店はあなたの買いつけの店です。あなたが、この店で買いものをして、おつり（かえし）をもらったら、おつりが足りません。あなたは何と言いますか。

この場面について、10～70代の男女の回答397人分（回答者数400人中、3人無回答）が得られている。なお、ここでは回答の文字化を用いたため、言語による（ことばとして発せられた）コミュニケーションの分析が主となる。ただし、音調などのパラ言語、動作などの非言語といった、他の伝達手段についても、限られた範囲ではあるが考察を行う。

2.2. 分析の立場

今回データを用いた調査は、疑似的に場면을提示した言語行動意識調査である。相手とのやりとりの中で言語行動を遂行する自然談話の資料と異なり、言うことをひとまとまりの発話に一気に盛りこんでいる。自然談話では、各参加者の出方や反応が相乗的に作用して事態が展開し得る。たとえば冒頭の(1) b でも、「オツリ、違ウミタイ」と言ったところで相手がすぐに計算の確認を始めれば、話し手は「チョット見テクダサイ」を言わずにすまずことになるであろう。

そうした動的な展開の一方で、話し手の頭の中にあるモデルとしての言語行動というものもある。それはたとえば、おつりの不足を指摘するにはこれこれのことを言うのが適切かつ必要だ、と話し手が考えているような、言わば当該の言語行動の「遂行イメージ」である。実際の相互作用の場で相手の反応に応じて変更や修正を加えられる前の、基本的にこういう出方をしたい、こう展開してしかるべき、と話し手が考えているような行動のイメージである。

本稿では、後者のタイプに関する資料を分析する。第二言語教育の諸研究も同様の方法をとっていたが、資料の規模や、被調査者の属性に限られている場合が多かった。ここでは、サンプリングによる大量調査の資料を用いることで、特定場面の言語行動遂行におけるバリエーションに関して、より一般性の高い所見を得ることを目指す。

2.3. 分析手段

分析にあたっては、各々の回答を、質問や依頼などの発話機能を担う最小部分と考えられる単位¹に分割した。以下に例を示す²。「／」は単位分割点である。

(2) コレ イマ モラッタ オツリデスケド／ イチド シラベテ モラエマセンカ

(3) アレ、／ イマノ カイモノ イクラデシタカ。／ イクラ ハラッタデスケドモ／ タリマセン³

個々の分割単位は、相手にどのような内容のはたらきかけを行っているかで分類した。また、この単位を基本として、各種の表現形式など、対人コミュニケーション上の効果に関わると思われる要因を抽出し、その中にどのようなバリエーションが見出せるかを検討した。

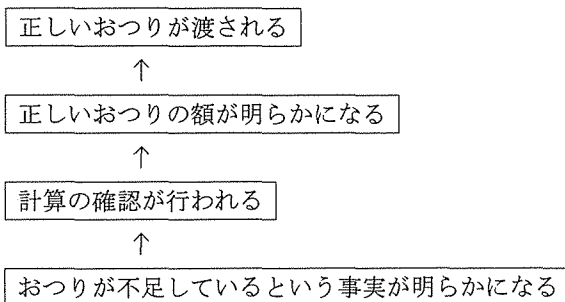
3. 資料におけるバリエーションの諸相

3.1. はたらきかけ⁴

分析資料にみられた各種のはたらきかけは、以下のA～Lに分類された。この分類によれば、上記の(2)におけるはたらきかけの組み合わせは「H／C」、(3)は「J／G／G／D」となる。

- A. 正しいおつりを請求する（例. イタダケマセンデスカ）
- B. 正しいおつりの金額を知らせる（ヒャクエンノ オツリデワ ナイデスカ）
- C. 計算を調べてくれるよう言う（モーイチド ケーサン シテミテ クレマセンカ）
- D. おつりの不足を知らせる（オツリガ タラナイヨーデスケド）
- E. 勘定／計算の間違いに言及する（ケーサン チガッテナイデスカ）
- F. これでいいのかと確認する（コレデ オツリワ イーンデスカ）
- G. 買物／支払い／もらったおつりの金額を確認する（ゴヒャクエン ダシマシタケド）
- H. 買物をした、おつりをもらったなど、状況を述べる（イマ オツリ イタダイタケド）
- I. 恐縮の意を示す（ワルイケド）
- J. 間違いに気づいた／疑念をもった様子を示す（アラ、）
- K. 相手に呼びかける、注意をひく（オバサン、）
- L. その他

これらのはたらきかけの各種は、行動目的の達成にどのぐらい直接的に関わるかに差がある。この場面での言語行動の究極的な目的は、正しいおつりをもらうことであろう。そして、その目的が達成されるまでには、以下に示すような状況の段階が存在すると考えられる。



上記分類のAは、最終目的である「正しいおつりをもらう」に直接関わるはたらきかけである。Bは正しいおつりの額の認識、Cは計算の確認という、より前の段階を達成するためのはたらきかけである。さらにその前の段階であるおつりの不足を知らせることについては、Dが直接的なはたらきかけであり、やや間接的なものとして、おつりとは明示的に言わずに買物の計算／勘定という形で間違いに言及するE、およびさらに間接的なはたらきかけとして、これでいいのかという疑問を呈するFがある。ことばをかえれば、A～Fはおつりの問題解決を目指したはたらきかけであり、最終目的に近いものから前段階的なものへと並んでいる。

GとHは、いずれもその場面における話し手の立場やそれまでの状況説明であり、いわばおつ

りの問題解決に向けて共通理解を確立するためのはたらきかけである。ただ、金額の問題に入っている分、Gの方が問題の核心に近づいたはたらきかけといえる。

Iは間違いを指摘することについて、あるいは次の客への応対中かもしれない相手に話しかけることについての恐縮の表明で、いわばやわらげの役割を担っている。また、JとKは、話し手自身の気づきを表出したり、相手に呼びかけたりすることで、これから行う言語行動の前ぶれのはたらきをする。

このように考えると、はたらきかけのカテゴリーとして、問題解決的なもの、説明や理解確保など認識調整的なもの、感情調整的なもの、談話管理的なもの、などがたてられそうである。

次に、はたらきかけの種類ごとの出現件数をみる。ここでいう出現件数とは、有効回答397件のうちで当該のはたらきかけが1度でも用いられていた件数である。

A. 正しいおつりを請求する	4 件
B. 正しいおつりの金額を知らせる	5
C. 計算を調べてくれるよう言う	1 0 2
D. おつりの不足を知らせる	3 3 9
E. 勘定／計算の間違いに言及する	4 8
F. これでいいのかと確認する	8
G. 買物／支払い／もらったおつりの金額を確認する	4 6
H. 買物をした、おつりをもらったなど、状況を述べる	2 9
I. 恐縮の意を示す	4 1
J. 間違いに気づいた／疑念をもった様子を示す	3 4
K. 相手に呼びかける、注意をひく	1 3 0
L. その他	5

上述のはたらきかけのカテゴリー別にみると、問題解決的なもの（A～F）のうち、直接的なAとB、最も間接的なFは使用が少なく、中間的なものが多く用いられていた。最も使用の多いDは、8割以上の回答にあらわれていた。それ以外のカテゴリーでは、談話開始の機能をもつKが多く用いられていた。また、「L. その他」と分類されたのは、以下のものである。下線部がLにあたる。

- (6) ア ドーモ アリガトー ゴザイマシタ／ コレデワ スコシ オツリガ タリナイヨーデ
ゴザイマスネ／ イチド タシカメテ オネガイ イタシマス
- (7) オツリガ タリナイガ／ アトデモ ケッコーデス。／ ホカエ マワツテカラ マタキマ
ス
- (8) オツリ イタダキマシタケド／ マダ サイフノ ナカニ イレテナインデスケド／コレ
チョット シラベテ イタダケマセンカ
- (9) ア／ オバサン、／ オツリガ タラナイケド／ チガウカシラ
- (10) チョット タラナイデスケドモ、／ イーデスカ

(6)の感謝のことばは、最初にきていることから、おつりを渡されたことへの応答かと思われる。(7)は、不足分のおつりをすぐにくれなくてもいいというやわらげの発話、(8)は確かにもらったままの金額であることを保証する発話であろう。(8)のような発話は、この資料では少数派として「その他」に分類されるが、たとえば都会の初めて行くコンビニエンスストアなど、店の人との面識や信頼関係が存在しない場面設定であれば、もっと多くの件数がみられるかもしれない。(9)は、おつりが足りないということを述べてから、断定の度合いを弱めるためか、相手に同意を求める発話である。(10)は、「確認してくれますか」の意味か、あるいは「もらえますか」の意味かもしれないが、判断しかねたため「L. その他」に分類した。

次に、はたらきかけの数と組み合わせをみる。今回の資料では、言語行動を構成するはたらきかけの数は、少ないもので1つ、多いもので5つであった。

含まれるはたらきかけの数ごとに回答をグループに分け、はたらきかけの種類ごとに出現状況をみた結果を、表1に示す。

表1 はたらきかけの種類ごとの出現状況 (件数)

はたらきかけ数	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1 (118 件)	0	0	3	97	15	1	2	0	0	0	0	0
2 (170)	1	2	39	146	17	2	14	7	21	15	73	0
3 (80)	2	0	42	68	13	3	20	12	13	11	38	4
4 (23)	1	3	14	22	3	1	9	5	6	7	14	1
5 (6)	0	0	4	6	0	1	1	5	1	1	5	0
計 (397)	4	5	102	339	48	8	46	29	41	34	130	5

使用数別に組み合わせのパターンをみる。1つのはたらきかけから成る場合は、D（おつりの不足を知らせる）が118件中97件と圧倒的に多く、それに15件のE（勘定／計算の間違いに言及する）が続く。

はたらきかけ2つから成る回答も、ほとんどがDを含む組み合わせになっている（170件中146件）。表1でははたらきかけの組み合わせごとの件数までは示していないが、資料の集計結果によると、Dの前に説明や前おき（G～K）のいずれかが付く形が170件中108件と大多数を占めていた。中でもK／D（呼びかけ／おつりの不足）の組み合わせが67件と多かった。また、C（計算を調べるよう言う）にDかEが付く形も34件あった。

はたらきかけが3つ含まれるものでは、K／Dに何かもう1つはたらきかけが付く形が比較的まとまった数あらわれるが、全体に組み合わせはさまざまである。それ以上の数のはたらきかけを含むものではパターンはより多様になるが、GやHの状況説明が加わることが、はたらきかけの数が増す主要因となるようであった。

はたらきかけの組み合わせについては、問題解決における直接性の段階に関係したひとつの傾向

が見出せた。複数のはたらきかけが連なる場合、おつりあるいは買物の話題に関わるA～Hのはたらきかけの中では、直接性の低いものから高いものへと並ぶ、という傾向である。正しいおつりを与えるよう頼むところまで言うか、おつり／計算はこれでいいのかと尋ねるところでとめるか、あるいはA～Fのいずれも言わずにすますか、どこまではっきりと言うかは回答によって異なるが、397件中374件において、用いられている中で最も直接的なはたらきかけが連鎖の末尾に位置していた。また、397件中365件において、H→Aの方向へとはたらきかけが順に並んでいた。すなわち、周辺的なことがらから徐々に問題の核心へと話をもってきて、問題解決に最も直接的に関わる発話でしめくくるという形である。たとえば、以下の例は「I/H/D/C」という形をとっている。

- (11) スミマセン／ イマ オツリ イタダイタケド／ チョット オカネガ タラナイヨーニ オモイマスガ／ イッペン シラベテ イタダケマセンカ

国研岡崎調査の他の場面の資料に関しても、目的達成に直接関与するはたらきかけは最後に位置することが多いという所見が得られている(熊谷1998)。また、日本人は重要なことを最後に言うという一般的な指摘もある。ここでの分析結果は、そういった日本人のコミュニケーションパターンのひとつのあらわれということができよう。

ただし、このパターンをとらない場合ももちろんある。問題解決に最も直接的に関わるのはたらきかけ(すなわち、言語行動の「核」ともよべる部分)の出現位置に関しては、今回の資料でも複数のバリエーションがみられた。(12)と(13)は「核」がそれぞれ最初と中間にくるもの、(14)は「核」が複数回あらわれるもの、(15)は「核」とよべそうなものが明示的にあらわれないものである(「核」にあたる部分に下線を付す)。

- (12) オツリガ タリナイガ／ アトデモ ケッコデス。／ ホカエ マワッテカラ マタキマス ((7)として既出)
- (13) ア／ オバサン、／ オツリガ タラナイケド／ チガウカシラ ((9)として既出)
- (14) イマ オツリ イタダイタンデスケドモ／ チョット、タラナイト オモイマスケドモ、／ イマ イクライクラ ダシマシタケドモ、／ イクライクラ カイモノシマシテ／ オツリガ チョット マチガッテナイデスカ
- (15) イマ アナタノ オツリオ イタダイタンデスケレドモ／ オイクラ オカエシ クダサイマシタカ

3.2. 発話の文のタイプ

同じのはたらきかけとして分類される発話部分でも、異なる文のタイプによって実現されることがある。たとえば、「G. 買物／支払い／もらったおつりの金額を確認する」の場合、「イマ イクライクラノ モノオ カイマシタケド」と情報を述べる形をとったり、「イマ カッタ モノ オイクラデショー」と質問して相手に言わせるようにしたり、「クワシク ソノ ネダンオ オシエテ クレマセンカ」と依頼したりと、さまざまな形をとり得る。これは、いわば相手にどのようにもちか

けるかの違いである。ここでは、呼びかけや間投詞、挨拶の慣用句などによって実現されるもの以外のはたらきかけ（A～H）をとりあげ、それらがどのような表現類型をとっているかをみた。分類にあたっては、仁田(1991)における発話・伝達のモダリティの分類をもとに、＜促し＞（命令、依頼）、＜表出＞（意志・希望、願望）、＜述べて＞（描写、判断）、＜問いかけ＞（疑問）のに分けた⁵。はたらきかけごとに、どのようなCategoryにあたる発話がみられたかを表2に示す。

表2 「おつり」の資料におけるはたらきかけと表現類型の対応

はたらきかけ	促し	表出	述べて	問いかけ
A. 正しいおつりを請求する	○			
B. 正しいおつりの金額を知らせる			○	○
C. 計算を調べてくれるよう言う	○	○		
D. おつりの不足を知らせる			○	○
E. 勘定／計算の間違いに言及する			○	○
F. これでいいのかと確認する				○
G. 買物／支払い／もらったおつりの金額を確認する	○		○	○
H. 買物をした、おつりをもらったなど、状況を述べる			○	

Cについては、「シラベテ モラエマスカ」のようなく促し＞の他に、「チョット シラベテ イタダキタイ」のようなく表出＞の形もみられた。Cと同じく相手の行動を求めるAは、資料では＜促し＞の形しかみられなかったが、やはり＜表出＞の形をとる可能性はある。B, D, Eでは、それぞれに＜述べて＞（オツリ タリマセンヨ、など）と＜問いかけ＞（オツリ チガッテマセンカ、オツリ タリナインジャ ナイデショーカ、など）の両方の形があった⁶。安達(1999)では、話し手が何らかの予測をもっているような「傾き」をもつ疑問文では、不確かさの表現の一種として機能の移行が起こり、疑問文としての情報要求機能から平叙文的な情報伝達機能への移行が起こる、としている。ここでみられる＜問いかけ＞の発話も、その種のものと位置づけられる。

前節では、はたらきかけの並び方によるバリエーションをみたが、表現類型に関しても、特定のタイプが比較的多くあらわれるかどうかで違いが出そうである。たとえば、相手への話のもちかけ方として、(16)は＜促し＞、(17)は＜述べて＞、(18)は＜問いかけ＞の傾向が強いと考えられる（当該の類型にあたる部分に下線を付す）。また、(19)はさまざまなものが含まれる、いわば混成型といえよう。

(16) ナンカ オツリガ タラナイミタイデスケド／ モー イチド チョット アタッテミテ ク
ダサイマセン／ イッペン カゾエテミテ クダサイ

(17) イマ コレダケ カッタカラネ／ コレダケ ナケレバ イケナインデスケド／ オツリガ
タリナインデスヨ

(18) イマ カッタ モノ オイクラデショー／ オツリガ コレコレデスケド／ チガッテ オリ

マセンデショーカ

- (19) イクライクラノ カイモノ シマシタケド／ オツリガ ヘンジャ アリマセンカ／ モー イチド ケーサン シテ クダサイ

また、文末が言いさしになっている回答も多くみられた。言いさしは、文を言いきらずに終わる場合を指すが、たとえば「チョット タリナイト オモイマスケドモ／ モー イチド ケーサン シテ イタダケマセンデショーカ」のような場合、はじめのはたらきかけの「オモイマスケドモ」が言いさしなのか、それとも次につながっている形なのかは、仮に音声情報があつたとしても判断が難しいことがある。そこで、ここでは回答の最後のはたらきかけとして用いられていたもののみについて、言いさし形の出現状況をみたところ、全体の1/3にあたる100件弱が「オツリガ タリナイヨーデスケド」のような言いさしの形をとり、「ケド」「ガ」「カラ」「ノデ」などで終わっていた。それらはすべて、＜述べたて＞の形をとるものであつた。＜問いかけ＞でも「タリナインジャ（アリマセンカ）」のように言いさしになる可能性はあるが、今回の資料にはそうした形はみられなかった。文末の言いさしは、はっきりと言いきらないことによって、相手の間違いを指摘するという行為をやわらげようとするものであろう。

3.3. 「おつりが足りない」と伝える表現

同じことがらを伝える際にどのような表現形式のバリエーションがあり得るか、最も件数の多かった「D. おつりの不足を知らせる」を例にとって検討する。このはたらきかけは、339件の回答に用いられていたが、同じ回答中に複数回あらわれている場合もあり、発話例としては352件あつた。

まず、断定的な述べ方を避けるはたらきをもつ表現について検討する。この調査での質問は、「返してもらったおつりが足りない時になんと言うか」であつた。その限りでは、回答者の立場としては「おつりは足りない」という確信があつて発話するという前提になっている。しかしながら、実際の回答がすべてそのことを断定的に述べていたわけではない。前節でみた＜問いかけ＞の使用や、文末の言いさしも、その方向での表現である。それらに加えて、推量の表現も、少なからずあらわれていた。それらは、本当の意味での推量を表すというよりはむしろ、やわらげの方策とみることができよう。副詞では、伝える内容をぼかすはたらきをもつ「チョット／スコシ」が136件、「ドーモ」「ナンカ」が各2件に使用されていた。また、＜述べたて＞の形をとるもの（267件）においては、「ミタイ」「ヨーダ」「キガスル」「オモウ」などが用いられた回答が70件あつた。以下に例をあげる。

- (20) チョット オツリガ チガッテルヨーナ キガ シマスケド

- (21) スコシ チガッテルミタイダケド

断定を避けたりぼかししたりする表現が用いられる一方で、具体的な情報をもりこみながらおつりの不足を知らせている回答もあつた。たとえば、「コレ ゴジューエン スクナインデスケド」など、不足の金額を明示的に述べるような場合である。これらは、漠然と「タリナイ」と述べるだ

けの発話に比べて、状況や主張の背景を具体的に論理だてて説明する際に効果がある。また、正しいおつりの額の計算に寄与しているという点で、より問題解決に向けて直接性の高いはたらきかけと位置づけることもできる。

ただし、具体的な情報を述べることは、必ずしも上述の断定回避の表現と相反する、あるいは矛盾するものではないようである。以下の例を参照されたい。

(22) ヒャクエン オツリガ タラナイミタイダケド

次に、同じことを言い表す際の語の選択についてみる。Dのはたらきかけに分類された発話には、「おつり」「足りない」を表わす形式が数種類ずつみられた。

まず、「おつり」の表現形式として多く用いられていたのは、直接的な表現である「オツリ／ツリ／ツリセン」(238件)で、やはり直接的な「オカネ／カネ」(15件)と合わせると、Dに分類される発話(352件)の約7割を占めた。もう少し婉曲な表現としては、「オカンジョー／カンジョー」があった。「カンジョー」は基本的にEで用いられる表現であるが、「カンジョーガ タリナイ」など、「カンジョー」が「おつり」の意味で用いられていると思われる3件を、Dに含めた。一方、指示詞「コレ」を使ったものが13件、さらには「おつり」にあたる部分を言語化しない場合(「チョット タランカッタ」など)が83件あった。

「足りない」の表現については、大きくまとめて「タリナイ類」と「チガウ類」に分けられた。前者では、「タリナイ／タラナイ」が232件と多く、他に「～シカ(モラッテ)ナイ」(7件)、「スクナイ」(6件)、「フソクダ」(1件)があった。より間接的な表現といえる「チガウ類」では、「チガウ／マチガッテイル／マチガイダ、等」が94件で、他には「オカシイ／ヘンダ」(10件)、「アワナイ」(2件)がみられた。

以上のような表現のバリエーションは、主にどの程度直接的な言い表し方をするかの違いによって出てくると考えられる。

3.4. 敬語、スピーチレベル

言語行動における表現の仕方の違いは、ものの言いの「丁寧さ」にも見出される。今回用いたのは敬語行動調査による資料であるため、個々の回答にことばの丁寧さに関する段階づけがなされている。この段階づけは、主に文末形式(大まかにまとめれば、ゴザイマス調／デス・マス調／ダ調の区別、およびイラシテクダサイなどの敬語形式の使用状況)を判断の目安としており、数値が小さいほど丁寧であることを意味する尺度である(判断基準の詳細については、国語研1983 p.62参照)。

ちなみに、この段階づけからみた回答の内訳は、以下のようであった。

丁寧度1： 37件(例：オシラベ イタダケマセンデショーカー)

丁寧度2： 263件(シラベテ モラエマスカ)

丁寧度3： 97件(シラベテ モラエンカネ)

ただし、ことばづかいは一概に丁寧なほどいいというものではない。positive politeness (Brown and Levinson 1987) の考え方に従えば、丁寧よりもむしろ親しみをこめて接することがポライト

ネスにつながる場合もある。従って、こうした丁寧度の段階も、話者が相手との関係や場面のあらたまりなど諸要因を勘案した結果、どの程度の待遇の仕方を適切と判断して言語行動を行っているか、という点からみた特徴づけの目安である。

3.5. 伝達手段

「おつり」の言い表し方が回答間で異なることは既にみたが、その際に、「おつり」に類することばを使わずに「コレ」ですませたり、ことばでは表現しない場合（例(24)の下線部に想定される）も少なくなかった。

(23) コレ マチガットリヤー センデスカ

(24) チョット スミマセン _____ タリナインダケドモ

このような発話は、電話会話でなく、対面状況の発話だからこそみられるものと思われる。この回答をみると、こうした発話をしながら話者がおつりを手にのせて店の人に示している、あるいは自分の手にのったおつりをまじまじと眺めてみせている、といった様子が想起される。すなわち、「おつり」の部分をことばで述べる代わりに、非言語行動で指し示しているわけである。このような場合、言語と非言語という異なる伝達手段が連携して（あるいは分担して）表現が行われたとみることができる。

言語行動に関与する伝達手段には、大まかに分けて、言語（ことばを発することによる伝達）、パラ言語（韻律やプロミネンス、間、声の調子、速度など、発話に伴う音声面での伝達）、非言語（身ぶり、姿勢、視線、顔の表情、など）の3種類があると考えられる。口頭コミュニケーションの場合、言語伝達とパラ言語伝達は必然的に伴い合うものであり、対面状況であればそれに非言語伝達が加わる。

今回の分析では音声資料がないため、パラ言語伝達については検討することはできないが、パラ言語の存在が文字化にもあらわれている回答はあった。

(25) ケーサンガ アワナインデスケドー

(26) イマ モラッタ オツリ チョット タラナインダケド…／ モラエマスカ

(25)では文末を言いさす際に音をのばしている様子、(26)では「モラエマスカ」の前で間があって話し手が言いよんでいる様子がうかがえる。それだけでなく、文字化の上では同じ形式に書き表される発話であっても、パラ言語の操作によって多種多様な意味あいや印象がうまれることは、日常経験として誰もが知っていることである。ことばで言っていることを表情や音調が強調することもあれば、逆にうらぎること（たとえば、冗談や皮肉の場合など）もある。各種の伝達手段の使い方、組み合わせ方も、言語行動のバリエーションを生むひとつの要因である。

4. 特徴分析の観点

前節では、資料分析をもとに、特定の場面での言語行動におけるバリエーションの諸相をあげた。所見の中には、分析対象となった特定の言語行動に限定されることがらも含まれている。た

例えば、用いられるはたらきかけの数はせいぜい3つぐらいまでの場合が多いというのは、この言語行動について得られた結果であって、言語行動一般についてのことではない。しかし、同じ場面の言語行動であっても人によって用いるはたらきかけの数が異なるということは、一般的に言えそうである。

本節では、より一般的なレベルで、言語行動のどのような部分にコミュニケーションとしての特徴や対人行動上の方策が見出されるかを考察し、言語行動の分析に有効な観点を提案することを試みる。以下では、言語行動の全体的な構成、および表現の仕方という点から特徴分析の観点をあげる。また、それらに加えて、言語行動が行われる際の指向性についても述べる。

4.1. 全体的な構成からみた特徴分析の観点

4.1.1. 長さと複雑さ

言語行動の構成については、どのぐらいの長さをもつものか、という観点がまずあげられる。長々と話しているか、短く言っているかの違いは、仮に日本語がわからなくてもとらえられる特徴であろう。発話の長さは、たとえばモーラ数で客観的に測ることができる。

発話の長さはまた、はたらきかけの数からもみることができる。はたらきかけには、呼びかけのように短い発話で実現されるものも、説明のように比較的長い発話を必要とするものもあり、はたらきかけの数が倍になったから発話の長さも倍になる、というものではない。しかし、はたらきかけの点から考察することによって、内容や行動としての構造の複雑さもみることができる。一般に、単一のはたらきかけから成る言語行動は単純な形で、いくつものはたらきかけを連ねたものは、より複雑な形をもつといえる。前者の場合は、目的達成を優先して「核」となる部分のみが述べられることが通常であろう。一方後者では、数多くのはたらきかけがくり出され、展開の仕方は多様になる。呼びかけや前おきの説明などでお膳だてがなされた後で本題が述べられ、しめくくりのはたらきかけもなされるような、いわば起承転結の整ったものであることもあれば、とにかく自分の主張を延々とのべたてるという意味ではたらきかけが多いということもあろう。その中間に位置するような構造もある。

はたらきかけの数が少ない場合は、時にはぶっきらぼうでつつけんどんな印象を与えることもあるが、状況次第では手短かで効率的ということになる。逆に、はたらきかけの多いものは、やり方によって入念、丁寧にも感じられるが⁷、押しが強い印象も与え得る。また、長さの点が問題になる場合には、くどい、非効率的という評価を受けることもある。

4.1.2. はたらきかけの組み合わせ方

はたらきかけの具体的な種類は、個々の言語行動の目的や、それが行われる状況によっても異なる。しかしながら、より一般的な機能に基づくカテゴリー、すなわち、目的達成を直接的に指向するはたらきかけ、話し手の事情をよりよく相手に理解させるはたらきかけ、対人感情を調整するはたらきかけ、開始や収束に関わるような談話管理的なはたらきかけ、といった分類は、言語行動の種類を問わず共通するものと思われる。

はたらきかけの Kategorii のとり合せ方も、個々の発話者や状況などによって異なる。たとえば、事務的で単刀直入に行われる言語行動は、目的達成のはたらきかけのみで構成されるかもしれない。また、事情が複雑であったり、相手への配慮が必要な場合には、理解補助や感情調整のはたらきかけを用いて入念な前置きをするかもしれない。どのような Kategorii のはたらきかけで全体が構成されているかも、言語行動を特徴づける要因である。

4.1.3. 表現類型の組み合わせ方

はたらきかけと表現類型の対応は対一とは限らないため、表現類型の組み合わせとしてみることで、はたらきかけとはまた異なる姿がとらえられる。話の進め方は同じでも、相手に述べたての形か、あるいは問いかける形かなど、表出姿勢の違いによって異なる態度や印象が伝わる。どのような表出姿勢をうち出すかは、話し手の側でも時として事前の「作戦」として考えることである。また、異なる姿勢をとり混ぜることで、問いかけで相手に委ねたり、次には促したりと、緩急をつけることもあろう。こうしたことも、はたらきかけの内容にある種の色合いを上をせする効果をもつ。

4.1.4. 「核」となる部分のあり方

言語行動において目的達成に最も直接的に迫る「核」の部分が、相手に対する行動としてどのぐらいの勢いや強さ、すなわちインパクトをもち、どの位置に出現するか、ということも、構成の特徴づけとなる。

まず、「核」の部分がどの程度直接的なはたらきかけか、ということがある。つまり、言語行動によって達成したい目的についてどこまでを口に出して言っているか、どのレベルでとめて、後は相手の反応などに委ねているか、ということである。それはいわば話し手の行動意図の提示に関することであって、積極的／消極的、率直／控えめなどと描写される特徴と密接な関係をもつと考えられる。

「核」の出現位置は、言語行動の重心が全体のどこに配置されているかということに他ならない。「核」の部分が冒頭に出ると、最初から問題の所在が明らかになるだけでなく、出だしにまず相手にインパクトを与えることにもなる。また、最後にくる場合は、下地づくりを経て結論に到達する、いわゆる順を追った展開となる。いったんポイントを出しておいてから説明に戻り、またポイントを再提示するという行きつ戻りつのパターンもある。また、仮に「核」とよべるほど直接的なはたらきかけをしない場合でも、非常に間接的な言語行動にはなるが、文脈や状況、非言語伝達などの助けをかりて意図を伝えることは不可能ではない。

4.2. 表現の仕方からみた特徴分析の観点

4.2.1. はたらきかけと表現類型との対応

言語行動の各部における表現の仕方に関しては、ある内容をもつはたらきかけ部分がどのような表現類型によって実現されるか、という観点がまずあげられよう。たとえば、何かを相手に伝

えるはたらきかけは、一般に＜述べたて＞の形で実現されることが多いと考えられるが、「オツリ、タリナインジャナイデスカ」にみられたように、＜問いかけ＞が用いられることもある。その一方で、相手に何かを尋ねたい場合に、＜問いかけ＞の代わりに「～ガチョットヨクワカラナインデスカ…」などと言うこともある。このように、はたらきかけ内容とずれる表現類型が選ばれるひとつの理由としては、安達(1999)でも指摘され、ここで見た例からも示されるように、表現をやわらげることがあげられる。パラ言語の使い方などによっては、必ずしもそれがやわらげの効果につながる場合ばかりではないかもしれないが、少なくとも発話にニュアンスを加味する手段としては機能すると考えられる。

4.2.2. はたらきかけのインパクトに関わる表現

判断を述べる際に用いられる「チョット」「タブン」「ミタイ」「ヨウダ」などの表現、あるいは文末の言いさしなども、話し手の確信不足の表明だけとは限らず、断定を避けるための方策であることが少なくない。行為要求のはたらきかけにおいても、時には「デキタラ（～シテクダサイ）」のようなやわらげの表現が添えられる。このように、はたらきかけ自体の方向性にブレーキをかけるような表現をするのも、自分の目的や意図を主張することは重要であるものの、主張しすぎても対人関係に問題が起こることを意識して、その調節を行うためと考えられる。

ただし、はたらきかけの強さを増すことが優先される場合には、逆にインパクトを与えるような表現が選ばれる。依頼の際に用いられる「ゼヒ」「スグ」などの表現が、その例である(熊谷1995)。

4.2.3. 情報提示の明確さに関わる表現

明確にポイントをついたものの言いを選んでるか、避けているかも、表現の特徴をみる観点となる。問題をより効果的に解決するためには、状況や話し手の意図を相手によりよく理解してもらうべく、具体的・明示的に情報を出すことが重要となる。今回分析した例でいえば、漠然と「カンジョーガ チガウ」と言うよりも「オツリガ タリナイ」と言う方が明示的になる。また、単に「タリナイ」と言うよりも、「ヒャクエン タリナイ」と言う、あるいは買った物の値段や払った代金がいくらだったかも併せて述べることは、具体的で明確な情報提示につながる。

その逆に、婉曲あるいは漠然とした表現が選ばれる場合には、実際に話し手も持っている確信の度合い以外にも、複数の要因が関わり得る。たとえば、「タリナイ」の代わりに「チガッテイル」「アワナイ」「ヘンダ」などの表現が用いられるのは、相手の誤りをあまりはっきり指摘しないという対人的な配慮もあるだろうが、同時に、金銭を請求する姿勢をあまりあらわにしたくない、という話し手側の思惑もあるのではないかと考えられる。

4.2.4. スピーチレベル

敬意表現やスピーチレベルも、対人行動面からみた表現の特徴としては重要である。ただし、上述のように、ことばづかいが丁寧なほど対人行動として好ましいとも限らない。くだけた形式を用いることによって、相手との距離を小さくして円滑に対人行動を進めようとすることもある。

敬語形式は、話し手が当該の言語行動において相手との距離（間合い）をどの程度に保つのが適切だと判断しているかを測る指標といえる。

相手との距離というと、一定の値が設定される静的な要因のようにも思えるが、スピーチレベルはもっと動的な観点としても機能し得る。言語行動が複数のはたらきかけによって構成される場合、スピーチレベルがその複数のはたらきかけを通して常に一定とは限らない。いわゆるレベルシフトが起こることもある。はたらきかけの種類やそれに用いられる文の類型に、ことばづかいの丁寧さがさらに絡んで発話が実現されていく。たとえば、依頼など比較的相手への負担が大きいのはたらきかけに関しては敬意表現のレベルを上げることで発話をやわらげる、などといった方策にも着目する必要があるだろう。

4.2.5. 伝達手段の組み合わせ方

対面状況においては、言語、パラ言語、非言語による伝達が、可能な手段として存在する。分析資料の性質上、本稿では後者2つに関してはごくわずかししか検討できなかった。しかし、ことばによる表出に加わる形で、あるいは代わる形で、パラ言語や非言語による伝達手段は用いられ、特に対人的配慮や感情面の調整が重要な場合に大きな役割を担うものと考えられる。同じ言語形式をもつ発話にしても、音調や表情によって千差万別のはたらきかけとなり得る。具体的な分析方法は今後の課題として残る部分が大きいが、言語行動の特徴記述において、パラ言語伝達および非言語伝達の機能や、言語的伝達との関わり方は、極めて重要な観点である。

4.3. 言語行動遂行における指向性

言語行動を行う話し手は、2つの指向性(熊谷1995)を常に併せもっていると考えられる。ひとつは、当該の言語行動の目的(依頼、謝罪、説明、など)を効果的に達成すること、もうひとつは、相手との対人関係を良好に保つことである。前者は、行動を起こすからには当然のことと考えられる。後者も、言語行動が対人行動であることを考えればもっともなことであるし、行動目的の達成のためにも相手の感情を損ねずにおくことは重要であろう。

本稿のこれまでの議論においても、言語行動の個々の特徴に関係してこれらの指向性に言及してきた。はたらきかけにおいても、また各種表現形式の使用においても、観察される諸特徴のひとつひとつが、これら2つの指向性のいずれにも関わり得る。すなわち、具体的なバリエーションの各々は、どちらの指向性をもつものかという観点から分類することができる。

ただし、2つの指向性は、両方を並行して追求するという単純なやり方ではすまないことが多い。目的達成を推し進めることは、話し手の意向を相手に押しつけることにもなり、そうなれば対人関係に問題が起きてくる。そのため、基本的に目的達成に関わる種類のはたらきかけであっても、それを実現する表現形式に対人配慮の機能を担わせるなど、表現・伝達の異なるレベルの相互作用によって、両者間での選択が行われたり、兼ね合いが図られたりする。

目的の効果的達成と対人関係の維持のバランスを保つことは、言語行動に限らず、人間が行うすべての社会的活動に共通するものである。これらの指向性の観点から言語行動の諸特徴をとら

え直すことによって、異なる言語行動を比較したり、言語行動をより広い対人行動一般の中に位置づける可能性も生まれるものとする。

5. まとめと今後の課題

以上、全体的な構成、個々のはたらきかけを実現する表現や伝達手段、行動上の指向性といった側面に基づいて、言語行動の特徴を記述し、多角的に分析するための観点を述べてきた。言語行動を、行動的機能を担った単数あるいは複数のはたらきかけから成るものにとらえ、個々のはたらきかけは、各種レベルの言語表現形式や、パラ言語、非言語なども含む多層的な伝達手段によって実現されるものにとらえた。このように多様な要素から成る複合的な実現である言語行動を分析的にとらえ、特徴を抽出するための観点として、以下のものがあげられた。

○全体的な構成

- ・長さと複雑さ
- ・はたらきかけの組み合わせ方
- ・表現類型の組み合わせ方
- ・「核」の部分のあり方

○はたらきかけを実現する表現の仕方

- ・言語表現（表現類型、主張の強さ、明確性、スピーチレベル、など）
- ・伝達手段（言語・パラ言語・非言語の使い分け、および組み合わせ）

○行動上の指向性

- ・目的達成指向／対人配慮指向のあらわれ方

これらの項目が言語行動をとらえるすべての観点を尽くしているわけではもちろんない。しかし、多角的記述の枠組みに向けての出発点となるものとする。

言語行動分析のひとつの究極的目標は、複数の観点から得られた特徴記述をもとに、日常的事物で描写されるような「行動の仕方」の印象（たとえば「そっけない断わり」「情のこもった説得」「弱腰の依頼」など）にどのような要因が関わっているかを説明することであろう。そのためには、それらの要因を拾い上げる分析観点を充実させるとともに、各要因の影響や効果について知見を深める必要があろう。言語行動の「表情」を生み出す上で大きな影響を及ぼすパラ言語や非言語行動についても、指摘は行ったが、実用的な分析の枠組みはなお今後の課題である。また、特定の印象を聞き手にもたせやすい言語行動のありようについても、意識調査などをもとに探っていく必要がある。

これらの課題が今後に残されているが、言語行動をより詳しく分析していくことによって、対人コミュニケーションをめぐるさまざまな問題、たとえば待遇表現などの言語形式の枠に限定されないポライトネスのあり方などにも、新しい角度からの光があてられるのではないかと考える。また、日本語教育における学習者のコミュニケーション能力育成に対しても、他言語による言語行動との対照研究に対しても、重要な知見や枠組みを提供できるはずである。

注

- 1 いわゆるmoveの単位にあたるものである。move の概念については、Coulthard(1977)、中田(1990)参照。
- 2 回答の表記は国語研(1983)巻末の資料にならう。
- 3 例(3)で、「イクラデシタカ」の「イクラ」は疑問詞であるが、「イクラ ハラッタデスケドモ」の「イクラ」は、本来なら何らかの金額が入るところを、回答者がある種の一般化としてこのような語形を用いて回答したと考えられる。この種の「イクラ」「コレダケ」「コレコレ」などは、以下の例でも斜字体で示す。
- 4 熊谷(1995,1998)においては、先行の諸研究にならってこれらを「ストラテジー (方策)」と呼んでいる。しかし、それよりも細かいレベルでも方策的な機能は認められるし、「方策」という用語はより抽象的かつ一般的なレベル (たとえば、対人配慮の方策、など) での目的達成手段について使う方が適切のように思われる。そこで、言語行動を構成する move のレベルでの出方については、「はたらきかけ」と呼ぶことにする。
- 5 仁田(1991)は、命令や誘いかけのモダリティを<働きかけ>としている。しかし、本稿では言語行動の構成要素となる出方を「はたらきかけ」と呼ぶため、混乱を避ける上でも<促し>という名称を用いる。
- 6 <問いかけ>の中に、「オツリ タランジャ ナイデスカ」のような形式が13件にあらわれていた。これらについては、中部方言において「ン」(「ノダ」の「ノ」の部分) が脱落すること、前後にあらわれている「スミマセン」「チョット ミテ クダサル」などの発話のニュアンスなどを考慮した結果、「足りないではないか」という(抗議めいた)指摘というよりも、「足りないのではないかな?」と問いかけているニュアンスに解釈すべきであろうと判断した。音調などによっては、指摘のニュアンスになる可能性を残しているが、今回の資料には音調情報がないので、上記の要因を一応の判断材料とした。中部方言による発話の意味解釈については、国立国語研究所の大西拓一郎氏、杉戸清樹氏、三井はるみ氏に御教示をいただいた。
- 7 国語研(1957)は、モーラ数が多い方が丁寧と聞き手に認識される傾向があると指摘している。モーラ数の多さ、すなわちことば数の多さには、はたらきかけの数も大きな影響を与える。また、はたらきかけの数と丁寧さの関係については、ことばづかいの丁寧な話者の方がはたらきかけも数多く使う傾向が指摘されている(熊谷1995,1998)。このことは、話し手の側でも、はたらきかけをあれこれ用いることによって丁寧さを表出しようとしている可能性を示唆している。

引用文献

- 安達 太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版
- 井出 祥子、荻野 綱男、川崎 晶子、生田 少子 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動』 南雲堂
- 熊谷 智子 (1995) 「依頼の仕方 ―国研岡崎調査のデータから―」 『日本語学』 14-11 pp.22-32
- 熊谷 智子 (1997) 「はたらきかけのやりとりとしての会話 ―特徴の束という形でみた「発話機能」―」 茂呂雄二編 『対話と知 ―談話の認知科学入門―』 pp.21-46 新曜社
- 熊谷 智子 (1998) 「依頼の言語行動におけるストラテジーの展開構造」 『国立国語研究所創立50周年 記念 研究発表会資料集』 (非売品) pp.111-116
- 国立国語研究所 (1957) 『国研報告11 敬語と敬語意識』 秀英出版
- 国立国語研究所 (1983) 『国研報告77 敬語と敬語意識 ―岡崎における20年前との比較―』 三省堂
- 国立国語研究所 (1984) 『国研報告80 言語行動における日独比較』 三省堂

- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析 ―勧誘のストラテジーの考察―』 くろしお出版
- 中田 智子 (1990) 「発話の特徴記述について ―単位としてのmoveと分析の観点―」 『日本語学』 9-11 pp.112-118
- 仁田 義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 『日本語学』 (1993) <特集 謝罪のことば> 12-12
- 『日本語学』 (1994) <特集 感謝のことば> 13-8
- 『日本語学』 (1995) <特集 依頼表現> 14-11
- Brown, P. and S.C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Coulthard, M. (1977) *An Introduction to Discourse Analysis*. London: Longman.
- Kasper, G. and S. Blum-Kulka (eds.) (1993) *Interlanguage Pragmatics*. New York: Oxford University Press.
- Kumagai, T. (1993) Remedial Interactions as Face-Management: The Case of Japanese and Americans. 湯本昭南, 桜井雅人, 馬場彰編 『松田徳一郎教授還暦記念論文集』 pp.278-300 研究社
- Olshtain, E. and A.D. Cohen (1983) Apology: A Speech-Act Set. Wolfson, N. and E. Judd (eds.) *Sociolinguistics and Language Acquisition*. pp.18-35. Rowley, MA: Newbury House.

付 記

本稿は、平成11年度から国立国語研究所日本語教育センターで行っている特別推進研究「言語表現の意味・機能の普遍性と多様性に関する研究」の成果の一部である。

(投稿受理日：1999年10月19日)

熊谷 智子 (くまがい ともこ)

国立国語研究所 115-8620 東京都北区西が丘 3-9-14

tkuma@kokken.go.jp

Factors involved in the analysis of linguistic behaviors

KUMAGAI Tomoko

The National Language Research Institute

Keywords

linguistic behavior, move, strategy, orientation, multidimensional analysis

Abstract

This paper proposes factors to be considered in the multidimensional analysis of interpersonal linguistic behaviors. A linguistic behavior may be realized in a variety of ways, depending upon the speakers, the context, etc. This paper attempts to elucidate the linguistic and behavioral factors involved in the production of various linguistic behaviors; it also explores the possibility of characterizing the factors that might permit one to objectively explain everyday descriptions of linguistic behaviors, such as “a businesslike request”, “warm advice”, etc. Based upon an examination of the data (discourse-completion-type answers from 397 Japanese informants) from a sociolinguistic survey conducted by the National Language Research Institute, variation was observed in the use of interactional moves, sentence patterns, expressions (words and phrases), honorifics, and paralinguistic and nonverbal communication. Based upon observations made of the data, the following factors were extracted to be applied to the multidimensional analysis of linguistic behaviors in general.

- overall structure of linguistic behaviors
 - length and complexity
 - combination of interactional moves
 - combination of sentence patterns
 - type and position of the “nuclear” move
- expressions
 - sentence patterns
 - hedges and intensifiers
 - mode of providing information
 - speech levels
 - paralinguistic and nonverbal communication
- orientation
 - goal achievement vs. politeness